

カール・ビュヒアーの自叙伝について

淡 川 康 一

一

経済学の研究に於て、其の政策的方面が強調せられることになれば、勢い独逸歴史学派に依る史的研究方法に、一顧を与えなければならぬ。本邦歴史学派の形成と展開とに多大の影響を及ぼした学者として、独逸新歴史学派の鴻儒・グスタフ・シュモラー (Gustav Schmoller) と併称された、他の一人として、カール・ビュヒアー (Karl Bücher) があることは、今更ら言うまでもない処である。而して其の特に本邦の斯学界に対する關係に於ては、後者の方が前者に比して遙かに深いものがあると思われる。其の生産及び交換の形態より見て経済發展の段階を自足経済、都府経済、国民経済の三個に分説した段階説は、本邦に於ける多数の経済原論が之を其の国民経済の發達を論ずるの章に、祖述、批判又は紹介しているのであって、古くは河上肇氏の「経済学原論」第四章第三節、福田徳三氏の「国民経済原論」第一卷総論上冊第三章、津村秀松氏の「国民経済学原論」上巻第五章第一節第三項等に見られ、近くは本庄栄治郎氏の「経済史概論」中、経済發達階段説を列序する章に、採録、批判

されているのである。以て其の發展段階説が本邦の経済学史上に占める地位の深刻且つ永続的であることを知る可く、其の他氏の論稿にして、抄訳、紹介、又論評されているものを掲げるならば、枚挙するに遑がないであらう。

(一) 一例として、神戸正雄氏稿「ビュヒアーの経済発達階段説は其独創に非ず」(『経済論叢』第三卷第三号)。

単行本の邦訳されたものとしては、原著 *Die Entstehung der Volkswirtschaft. I* が権田保之助氏に依り、「経済的文明史論」と表題せられ、^(一)又原著 *Arbeit und Rhythmus* が高山洋吉氏に依り、「労働とリズム」と云う題の下^(二)で、夫々逐字全訳されているのである。前者の邦訳者は、其の序文の冒頭に於て、「私が学生時代に最も愛読した書が二つあった。其の一は Karl Bicher, *Die Entstehung der Volkswirtschaft* (ビュヒアー著「国民経済の成立」)で、他の一は Heinrich Waentig, *Wirtschaft und Kunst* (ウエンティヒ著「経済と芸術」)であった。此の二箇の経済学者の好著は遂に私をして「価値の芸術的研究」という卒業論文を草せしむるに至り、美術工芸論に私の研究の帰結を発見せしむるに至ったのである。私がビュヒアーの該書を翻訳しようと思ひ立ったのは已にその時代からであつた。(後略)」と述べて、邦訳着手の動機の一端に触れ、更らに続けて、「(前略)原著は題して『国民経済の成立』という。然かしの題号は著者が已にその序文にのべている如くに、書中第三の講演の標題を其の儘取り来つたものである。著者はこの理由を此の講演が本書の根本思想を最も直截に表しているが故であると云つて居る。けれども此の書は同じく原著者の序文にあるが如く、版を重ねるに伴れ五講までも増している。根本思想には毫末の変化はないにしても、其の形式には変化が生じて居る。而已ならず経済学の文献に素人なる人々にとっては『国民経済の成立』てふ名は本書全体の概念を把握するに少々不便の感がある。茲に於て私は『

「経済的文明史論」という原書の何処の頁にも表わされて居ない全然別の名を以て之に冠することにした。蓋しビュヒアーの意、経済的文明の側面を抽出し来つて、以て人類進化の史跡を整理せんとする史論を草せんとするにあつたのであると封度し得らるるが故である。（後略）。この訳者序文中より摘出した一、二の断節は、又以て本書全般の梗概を伺わしめることにもなるであらう。尤も本書の邦訳は、権田氏に依るもの他に、すでに福田徳三氏が雑誌「経済世界」に、「経済進化論」と題して連載されたことがあるが、同誌廃刊の爲め絶稿となつて遂に完結せず、其の後之を全訳したのは、権田氏の労作である。原著は経済学の世界的文献として、沿ねく欧米各国に行われ、既に英、仏、露、伊、ポヘミヤの五国語に翻譯せられ、其の英訳はウィッケット (Wicket) 氏の手になり、「産業進化論」(Industrial Evolution) と云う題号が冠せられているのである。次に「労働とリズム」の邦訳者・高山氏は、其の「訳者の言葉」と題する跋文の中で、「(前略) ビュヒアー博士のこの書は、労働とリズムとの關係についての獨創的な理論を基礎に、東西古今の作業歌二百八十七歌を系統的に集めて、リズムと歌とが労働に及ぼす作用を実証的に研究したもので、経済史学の上から極めて興味深いものであると共に、吾々が現在当面している経済的及び社会的生活の上に幾つかの重要な示唆を投げかけている。例えば学校に於ける体育に音楽や舞踊が取入れられて久しいが、これが科学的研究はまだ寥寥たるものやうである。また、近代的工作場に於て現在リズムを利用し、音楽の力を用いて作業の規整・軽減、ひいてはその能力向上労働者の厚生・福祉増進の企図がなされているが、この方面の研究もまだこれからの観がある。(前略)」と述べて、本書邦訳の持つ意義の一端に触れているのである。原著者は本書の開巻劈頭に於て、「労働は一切の経済的現象の出発点を成しているにも拘らず、この労働の本質が国民経済学者によつて根本的に研究されたのは、今までの所、甚だ稀である。多くは

これを一箇の経済的範疇として取扱ひ、この労働の心理的及び社会倫理的な面にも立入ると、既に余計なことをしたものと考えていたのである。」と呼号し、労働に対する、歴史派独自の、広汎な社会経済史的研究の必要を提唱するのである。其の趣味の広いことは、本書が音楽科学の研究者にとつても亦、到底閑却し得可からざる一文獻となつてゐるのにも見ても、首肯されるのである。

以上、ビュヒアーの原著になる、二種の邦訳書に就て紹介したのであるが、若し私の想像が許されるならば、是等が何れも正式の翻譯権を獲得するに至らずして、出版されたことに、その学問的欠陥が潜むのである。是等兩邦訳書の何れを見ても、訳書の一般的慣例となつてゐる如き、原著者又は出版書肆との翻譯に類する交渉の顛末に触れた言辭は、一として見出されないのである。尤も高山氏の訳書は昭和一九年六月三〇日に初版が発行されたのであるから、戦雲未だ収らざる時ではあり、かかる交渉に及ぶ機会に恵まれなかつた事情もあるであらうが、何れにしても、筆者は正式に翻譯権を獲得した、ビュヒアー氏の原書を邦訳し度い念願を養うことは、一朝一夕ではなかつたのである。今ここに問題にしている邦訳書の一である、権田氏の著作は、ビュヒアー氏の原著の第一集に止り、第二集には着手されなかつたのである。氏が何故に第一集だけで擱筆されたのか、其の間の事情は之を察知する由もないのであるが、曾て氏と同僚として大原社会問題研究所で机を並べていられた林教授の談に依れば、結局煩しい翻譯の仕事であり、且つは第二集は第一集に比して更に難解な論文も多く含れている事情に基くのではなからうかとのことであつた。彼此思い続けた筆者は、是非第二集の邦訳、而かも正式に翻譯権を獲得して後に之を遂行しようとして計画したのである。かかる事情から、出版書肆と邦訳許可の交渉を初めたのであるが、予期の通りの難関で、容易に打開さる可き形勢も見えなかつたのであるが、最近起稿、送付した、「カ-

ル・ビュヒアーと日本の経済学」と題する独文の小稿が、意外にも事情を好転せしめる動機となり、元より煩瑣且つ厳格な条件を前提としてではあるが、遂には邦訳権の無償譲渡と云う、斯界としては破格の恩恵に浴した次第である。筆者に取っては寔に過分の取扱いであることを感謝すると共に、是非其の任務を完成す可く決意を固め、日夜訳著執筆の稿を急いでゐるのであるが、過般も恩師・宮田教授に之を諮つた処、小拳を賛せられると同時に、ビュヒアー氏の学説を検討、精研するには、合せて参考に資す可き一書ありとて、その書架より取り出された冊子は、「生活回顧」と題する、氏の自叙伝であつた。^(四)此書籍は数ある、ビュヒアー氏の労作の中では、割合に知られていない様でもあり、且つ可なりの稀少性もあるので、ここに其の一端に就て、記述、考究して見よう。

(一) 権田保之助訳・ビュヒアー経済的文明史論・大正六年初版、大正一〇年改刻二版。

(二) 高山洋吉訳・カール・ビュヒアー労働とリズム・昭和一九年初版。

(三) K. Bücher: Arbeit und Rhythmus. 3. Aufl. S. 1.

(四) K. Bücher: Lebenserinnerungen. 1. Bd. 1919.

二

一人の偉大なる学者の学説は、其の経過し来れる生涯、又其の置かれた社会的環境に深く影響されることは、多くの実例が教える処であるが、今ビュヒアー氏の場合に就て、其の自叙伝と学説構成との関係が如何に観察されるかを、自叙伝中の、若干の事実を引用して、記して見よう。

「國民經濟成立起源論」の第一集、第二集を通して、自給自足的産業としての農業の特色が詳述されて居り、殊に第二集には其の第三講に、「農業」(Landwirtschaft)と題する独立の研究が収録されているし、其の他随處に農業に関する、鋭利な觀察がひらめいている。例えば、流通經濟の究極の段階としての國民經濟の特徴を叙述してから、「勿論總ての經濟が發展の、同一段階に到達したと云うのではなくして、工業的企業家、商人、銀行家、都市の手工業者、公的並びに私的職員、一般勤勞者、工業労働者のみであつて、一方其の需要品の大部分を自ら生産する農民、農耕を兼營する、田舎の手工業者、給料を實物で支給される農業労働者、是等の人々は何れも尙お今の段階と以前の發展段階の、兩者の原則によつて、其の經濟を営むのである。而して彼等は其の需要を形成するに當つても、近代の都會人に比すれば、一層多くの、古い慣習と、而して近隣の判断に依存するのであるが、都會人は其の様な思慮をめぐらさないであろう。」と説いているのである。^(一)又近代に於ける家政の特徴を叙述するに際して、「近代の家政は、前の時代に比すれば、安定性が少いと云うことも、其の特徴であり、習慣以外の要求には、前の時代に比して、適応力が一層僅かである。尙お五〇年前には、どの家政も其の使用財の中には、例えば亜麻布、罐詰野菜、乾燥果実、塩漬又は燻製に依る肉類の如き、貯蔵品を含んでいたのであるが、現今に於ては、万事は需要の瞬間に、而かも少量づつ買ひ求めることが出来るのである。若し田舎の徒弟が其の全家族で都會の親戚を訪問するならば、其の計画を予知して、万事を充實して待つてゐる親戚は、宛かも其の日が總ての店舗の閉鎖されている日曜日であつても、何等狼狽する處なきも、若し其の一行が家庭の食卓で饜應される代りに、料亭に案内されたならば、彼等はあはてて不思議に思ひ、種々粗忽なる件が発生することであろう。」と記してゐる。^(二)

以上に掲げた一、二の断片によつても分る通り、かかる、微に入り、細を穿つた農村描写は、如何に峻敏な観察眼を有する人と雖も、自身を農村の環境に置いた者でなければ、為し能わざる処であろう。この様な事例を我國の学者に就て求めるならば、荻生徂徠もたしかに其の一人であろう。徂徠は其の一四歳の時父の方庵が東に座して上総国長良郡本能村に配流せらるるや、共に其の地に赴き辛慘を嘗むること十二年、二五歳の時、赦されて江戸に帰つたのであるが、其の間彼は寒村の田父野老と接するのみで、勉学の途なく、好學心は甚しく抑えられたのであるが、之が却て地方農村生活を知る機会を得、後年に於ける「武士土着論」其の他實際事情に立脚せる彼の論策は、多くは其の南総の生活によつて得た処であると云われている^(三)。ピュヒアーの「生活回顧」の中で、農村に人と為り、其の少年時代の、色々の出来事を斜述した断片に、次の様な一節が見出されるのである、「田舎の環境に於ては、総ての社会的評価は土地の所有と云うことを基準に行われるのである、総ての顧慮は天候を中心として行われ、而して総ての会話は作柄の状態或いは家畜の生育を中心にして取り交わされるのである。今でも私は屢々次の様なことを不思議がっているのである。即ち私は私の父の工業経営を総ての、其の詳細の点に於て精しく学んだのであるが、然し此処で又最も簡単な労働自体を實行す可き気持ちには一度もなれなかつたのである。然るに農業上の経営に属した、総てのことは、最少年時代から手づから遂行するとを学んだのである。今でも私は指の処に一の刀痕を示し得るのであつて、之は穀物を切る際の、正しくない、鎌の打ち方から来ているのである。生徒であつた時に、私はボン (Bonn) の近傍で、つめ草を刈り取る際の、彼の、辛い労働を慨いていた処の農家から大鎌を買い取つたのである、而して私は其の労働を又為し得ることを彼に示して、彼を少からず驚かしたのである。私が一四歳の時に、私の父が私に耕耘することを教えるまでは、じつとしてはいなかつた

のである。而して晩秋の終りに絶ての、吾等の、切株の耕地が私自身の手で掘り返されて犁の跡がついていた時には、如何に私は得意であつたろう。尙お生徒の時に、私は燕麦を刈り取ることを学んだのである。而して假令私は後になつて其の技術を利用することが出来なかつたとは云え、其のことに就て重荷を負わなかつたのである。今や同じ耕地の上では、刈り取り機が使用されて居り、而して以前には数週間継続した処の収獲は数日に集積されてゐるのである。^(四)」。

而して都會人と農村住民との、生活労苦を比較してゐる断片は、最も興味を覚える。次に摘録して見よう、「野仕事は極めて簡単な様に見えるのであるが、どんな野仕事でも、其の特別な遣り方があり、若し其の遣り方が効驗ある様に行わる可きであるならば、之を知り、而して出来なければならぬ。農民が夕方に帰宅すれば、彼は文字通りに疲労し、而して早く其の住いを探し求めるのである。彼を眠らす様に、歌をうたう必要はない。男は如何に早く年を取るか、而して女は如何に速かに其の美を失うか、其のことに就ては、屢々驚かされることがある。而かも、生活苦は彼等には都會住民に於るが如くに、直接に迫ることは稀である、都會人の全需要は絶えず新たに貨幣形態を採るのである。^(五)」。其の立定した經濟發展段階説である、家内經濟、都市經濟及び國民經濟の三区劃は、生産消費道程の長短から見れば、對等の地位を有する様であるが、ピュッヒアーが之と對照せしめた名称、即ち交換なき經濟、直接交換及び貨物循環の三者に就て考へるならば、最初の家内經濟は自給自足の段階であり、後の二者は何れも流通經濟の時代である。而して流通經濟と云ふことの、最も明白な特徴は、吾人の經濟を立てるのに凡て貨幣金錢に換算して財貨を遣り取りすることであり、吾人の經濟上の現象は直接又は間接に貨幣に關係を持つのである。之に反し自足經濟にあつては、貨幣とは全然關係を有せず、此の發展段階説に於

ける本質的區別が、ここに拔萃した、氏の農村描写の一端にも、伺われるのである。

権田氏は其の「経済的文明史論」の序に於て、ビュヒアーの文章を賞讃して、「また彼の文に至つては、その論陣の堂々その行文の流達洛陽の大道を銀鞍白馬を馭るの概がある。」と形容していられるのである。^(六)私も其の原著を読み行く裡に、其の形容が真実であることを痛感したのであって、殊に各文章は比較的短文で綴られ、而かも余韻、含蓄を以て寸鉄人を刺すの特色が、明かに看取されるのである。この辺の消息を、権田氏は「その論陣の堂々」と云う文句で表現されたのではないか。この様に観察して、其「自叙伝」を読むと、夙に氏の行文に影響を与えたと思われる一記事が、見出されるのである。曰く、「私の父は彼の説話格言（Sprichwörter）を混入することを好んだのであった。而して是等の中の少からざるものは、私の全生涯を通して私に残る様になつたのである。是等の中の若干のものは、彼には個性的に独自なものであつたであろう。他のものは世代から世代へと継承されて了つた処の古い相統物であつた。」^(七)氏が輓近の、資本主義経営に依る新聞企業の一だ特色を道破した、「現代の新聞は広告と共に記事を売る事業なり。」と云う、有名な立言、又「新聞の発行者は彼の編輯の労作が其の新聞に確保する様になつた処の読者圏を、あらゆる、支払能力ある私的関係へ売り付けるのである。」^(八)と云う記述等、短言の裡、克く事物の問題点を洞察せしめる手法は、氏の、かかる格言愛好癖から来ている一面があることも、看過し得ない処であろう。

ビュヒアー氏の伝記を叙するもの、必ず氏を以て史的研究に名ありと云う一節を挿むことを忘れない様である。成る程氏は経済史家として有名であるが、其の開拓された業績分野に至つては、必ずしも単に歴史的研究の範圍に踞躅としていないのである。氏の生れ故郷であるキールベルク（Kierberg）の近郊には、極めて多数の森林

名及び草野名があり、為にどの森林の一部及び草野の一部も、殆ど其の固有の名称のないものを叙述し、^(九)此記事を受けて、次の如く続けているのである、「言語史的な傾向が私に其対象を一層接近せしめた時に、以上の様なことを、私は後年に於ても亦試みなかつたのである。之に反して、私は史前の墓石及び古代の鑄鉄場の痕を、すでに中学校の生徒であつた時に森林の中で熱心に探求したのである、而して若し私が仮りに之に對する手段を持つていたとすれば、好んで発掘を企図したことであろう。実に恐らくどんな学者生活でも、歴史的遺物を過度に尊重する一時期がある、而して之を尊重することに於て、現在の新鮮な生活を余りにも容易に忘れ勝ちであり、此の新鮮な生活は又其の權利を要求するのである。何れにしても、假令私の故郷の原野は私に多くの謎を課したのであるが、私は何等の考なしに是等のものを看逃したのではない。吾人の生地^(一〇)に於けるよりも、寧ろアテネ人の牙城又は羅馬の市場に精通する方が、恐らく我等の教育の又一目標である。」。此一節は単なる尙古癖に耽ることを深く警戒しているものと見る可く、經濟史研究の態度は絶えず現在の經濟現象と関聯を保ちつつ進められなければならないことを、暗示しているのである。而して此の示峻こそは、後年氏の業績の中で最も有名な論稿となつてゐる「國民經濟の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)の冒頭で、經濟發展段階説の意義を強調した一論旨として展開されているのである、曰く「従来の研究法の不完全なりしことを最も明かに認め得るものは、旧き時代の經濟、或は文化未だ開けざる民族の經濟に對し、現代の文明人の經濟方法を區別する特徴を与うる其の方法、即ち之である。この特徴を与うることは、所謂進化の段階を立つるの謂であつて、其の各段階に附したる各称によりて、經濟史的進化段階の主相を、暗語式に云い表わすことである。

此の如き「經濟的段階」を立つることは、これ學問研究上缺く可からざる手段であつて、依つて以て經濟學說

が経済史的研究材料を善用し得る唯一の方法を供するものである。斯かる経済的進化段階は、かの歴史家がその材料を分類する時代分けとは、之を同一に見ることは出来ぬ。歴史家にありては、「時代」内に生起せる重要事項の一切を挙げて数えねばならぬものであるが、理論家に於ては即ち然らず。彼が立つる段階なるものは、ただ常規の事相のみ表すべきものであつて、偶発の事項は、平然之を過眼し去り得るものである。^(二二)。斯の如く概念的に歴史を見ることは、ゾムバルト (W. Sombart) と並んで、ビュヒアーの研究方法の特徴とされている処であり、マックス・ウェーバー (M. Weber) の所謂理想型 (Idealtypus) なるものも、之に一の形式を打ち立てたものである。^(二三)

然し一の発展段階に於て、其特徴的事実を抽出し、概念を構成する場合に於ては、其が確実な歴史的材料の上に組み立てられなければならぬことは、いうまでもない。氏が其の自叙伝の中で、次の如く、都市制度の研究と並んで、個々の地方史の精査の必要を促している事實は、資料を悉皆網羅することこそ、確固たる概念を作る唯一の方途であることを、示したものであろう、曰く「個々の町村の歴史を解明することは、都市制度、又は個々の、古い都市団体の起源の歴史を考究することよりも、遙かに有益であらうと云うことを、私は後になって屢々考えざるを得なくなつて来たのである。然しこのことが出来たでもあらう処の、大抵の人々にとつては、個々町村の歴史を解明することは、諦めの念に満ちた仕事と思われたのであつた、而して期待される可き結果は、彼等にとつては、僅かの価値の様に見えるのである。かような訳であつて、社会の深底部は其の歴史的生成に於ては解明されないままに残されているのである。而して社会体の諸尖端を照らす、弱い陽光は、此の底部を温めることが出来ないのである。若し吾人が歴史的に到る処掘り下げるならば、吾人は現在を初めて一層よく理解するであ

ろう。後年に教授となつて、私は、若し学生にして地方から來ている人があれば、好んで彼等の故郷の町村の經濟事情を描写することを課したのである。而して若し彼等が此の描写を把握して了つたならば、彼等は又一般的理論をも、一層よく理解したことを知るに至つたのである。^(一三)

「國民經濟成立起源論」の第二集中で最も長文の論稿は、其の十一篇として収録されている「消費」(die Konsumtion)と題する一章であるが、氏は此論文に於て、近代の生産が所謂大量生産の法則に依つて個性が漸次没却されることを慨歎し、出來るならば、消費生活の面に於て人間の個性を永く確保す可きことを主唱し、例によつて歴史的に比較考察を遂げて、經濟が発達すると、生産と消費とが分離して營まれ、かくして消費が獨立して形成され得る限り、以前の經濟段階に見る如き、其倫理的風味が失われるに至つたことを指摘し、「昔の花嫁は其の嫁入仕度の品々を永年に亘る、自己の労働によつて自から集め、又は自分で選定したのであつて、是等の人々は其の、リンネルの容れてある箆笥を、都會の女達とはまるで異つた思いで眺め、又之を利用したことであろう。都會の女達は其の倉庫に於る家具を、僅か数日間で買い集めることが出來るのである。」^(一四)と極めて巧妙な心理描写を行っているが、之は氏の自叙伝に於る次の様な、自からの体験から割り出されたことを想う時、一段と深い興味を以て我等に迫つて來るのである。曰く、「私は昔の家婦、即ち其の洗濯物を容れる箆笥が亜麻布の貯えで滴され、是等の貯えの爲には彼女と恐らくは既に彼女の母及び祖母が絲を自身で紡ぎ、而して是等が父より受けた方法で晒された、この様な環境に置かれた家婦のことを考へて見るならば、其を使用するに當つては、總てのものが短時間で商人から調達せられ、而して其の物品の工場在庫品へは何等の思いも馳せない現在に於るとは、全く異つた感じの価値が生々として出て來たに相違ないであろうと、私は思うのである。今でも尙お私は、私の

家に一七八六年の年号がある、一枚のテーブル掛けを保存して居り、此の年号は此の品物の図中へ芸術味豊かに織り込まれているのである。此のテーブル掛けは曾祖母の代から伝来し、而して私は、彼女の勤勉な手が次に来る世代の為に制作したものを利用し得ることを考えると、私は幸福である。故に古い相統品は、其等が仮令流行に遅れていようとも、敬重す可きであらう。^(二五)

「経済」(die Wirtschaft)と云う言葉を基本語に組んだ複合語、例えば die Eigenwirtschaft (自給自足経済)、die Bedarfswirtschaft (需要充当経済)等と並んで、氏の造語になる言葉に、die Vorratwirtschaft (貯蔵経済)と云う字があるが、之は現在の消費生活と往時の其とを比較考察する秘鍵として、著想されたものであらう。氏の創案になる経済発展段階説の中の、最初の段階である封鎖的家内経済 (die geschlossene Hauswirtschaft) に於ては、生産と消費とが同一の経済単位の中で営まれることが特徴とされているのであるが、此の段階にあつては、新たな需要が形成されることに對しては、大なる障礙に直面する訳であり、あらゆる欲望には一種の制動機が置かれ、此の制動機は欲望を充当する為の手段を先ず作る必要から生ずるのである。

かくして、欲望と其の充当との間には、屢々長期の時間が割り込み、追隨する生産が之を許す場合に於てのみ初めて欲望を充当することが出来るのである。加え此の段階の経済は農業に立脚する故に、多くの自然的偶発事件に曝され、其の收穫は自然の成り行に依存し、豊作と凶作とは互に交替するのが常である。かかる経済の特徴を表わしたものが、氏の所謂「貯蔵経済」(die Vorratwirtschaft)であつて、^(二六)之にあつては、財貨の構成に於ては所得と財産とが、又財産に於ては消費手段と營利手段とが、何れも別たれず、例えば紡車と連枷は椅子、卓子と同様に家具であり、倉庫に堆積された穀物と地下蔵の果実の貯蔵されたものとは、消費財であると同様に、生産

手段である。貯蔵経済に就て、自叙伝では、次の様な、可なり抽象的な説明が為されている。「恐らく往時の貯蔵経済 (die Vorratswirtschaft) は、総ての点に於ては儉約的であり且つ経済的ではなかつたのである。今日細心に節約される多くのものは、此の経済にあつては、失われたことであろう。若し経済技術的に利用されないならば、今日失われる多くのものも亦、然し節約されたことであろう。今日とは異つた見積りを為したのであつたし、又屢々全然見積りなどせなかつたのである。此の経済は寧ろ多くの自然物に等しかつたのであるが、今日の経済は合理化 (Rationalisierung) の原則に支配されて来たのである。」^(一七)此要約された、而かも顯敏な記述は、今日の経済と往時の其とを峻別するに資し、経済史的事実を分析するに當つても、裨益する処大なるものがある。我國の江戸時代に於る实例に就て見れば、「天下を治るに穀を貴び貨を賤しむるは古の善政也。先王の道也。穀は民の食物也。食は民の天也。一日もなくては叶わぬ物也。貨とは金銀貨也。金銀は勝れたる宝と人毎に思えども飢えたる時金銀を嚙ては腹充ず、一椀の粥を啜れば死を免がる。」とか、「米穀は人の命にかかわり候物にて、無此上大切なるもの、凶年等に至り候而は、軽きもの寒中一衣をぬぎて米を買いても猶足らざる時は餓死にも可及候。」などといえる類は、枚挙に遑なき程であつて、要するに貴穀賤重の思想が、当時洽ねくり行われたのであつた。^(一八)然し豊年に於ては、米穀を浪費した傾向も、ないではなかつた。原上無休と云う人が天明七年に「五穀無尽蔵」と題する一書を編んでいるが、之は養和、寛文より享保、天明に至るまでの凶年の出来事を記し、併せて備荒貯蓄、窮民賑恤の方法等をも述べたものであるが、其中の一節に、天明元年五日今宮神事の翌日、「予他に出る事有て折節雨降たりしが鮎の飯を家々の門先に捨しこと誠に磯打白浪を見るところ、同月六月十四日祇園会の後、辻々の門際にまた鮎のめしを捨、ぶつぶつとくさりあるを見て」云々といえる如き、其の一例であり、

かかる風習は殊に都市に於て甚しかった様である。

- (一) K. Bücher : Die Entstehung der Volkswirtschaft. 2. Sammlung, 8. Aufl. S. 347-48.
- (二) K. Bücher : a. a. O. S., 348-49.
- (三) 本庄栄治郎氏著「日本経済思想史」一五七一—五八頁。
- (四) K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. 1919. S. 4-5.
- (五) K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. S. 12.
- (六) 権田保之助氏訳「経済的文明史論」改刻第二版、序二頁。
- (七) K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. S. 10.
- (八) K. Bücher : a. a. O. S., 289.
- (九) K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. S. 15.
- (10) K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. S. 16.
- (11) K. Bücher : Die Entstehung der Volkswirtschaft. 1. Sammlung, 16. Aufl. S. 87-8. 権田氏訳「経済的文明史論」大正一〇年版、一一二—一三頁。
- (12) M. Weber : Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. 1922. S. 164ff.
- K. Bücher : Lebenserinnerungen. 1. Bd. S. 16 ; vgl. von Below : Probleme der Wirtschaftsgeschichte. 1920. S. 191-92.
- (13) Derselbe : a. a. O. S., 348.
- (14) Derselbe : Lebenserinnerungen. 1. B. S. 36.
- (15) Derselbe : a. a. O. S., 342.

(六) Derselbe : Lebenserinnerungen. I. Bd. S. 36.

(七) 本庄栄治郎氏著「日本経済史話」一四五—四六頁。

三

以上、氏の学説と其の生活断片との關係に就て略述し來つたのであるが、此の「自叙伝」全般に亘る考究は、之を他日の機會に譲ることとして、今次に其の卷首なる、氏のものした序文を紹介し、以て本書成立の事情を明かして置き度いのである。

私に好意を持つ友人達は、私の人生からの諸回想を書き下ろす様に、私に屢々慫慂したのである。然し、私は誰の為にそんなことが必要である可きか、又役に立つ可きかと云うことを、長い間眺ることが出来なかつたのである。過去のことを掘り返すことについては、私は少しも多くの時間を余分に持つて來なかつたのである。而して將來を過去の重味で荷負わすことは、私にはどうしても賛成し得なかつたのであつた。然し最近私に就て新聞で、私が常に無性な人間で押し通して來たと云うことが、言われるに至つたのである。而してかかる人間に取つては、曾ての農村青年から今のライブチヒの大学教授までの、長い道程が、如何に棘栗多く生成したに相違なかつたと云うことが、漸く私に意識されて來たのである。而して私が殆ど忘れて了つていた処の私の幼年時代の一事件が、急に私に蘇み返つて來た。ダウボルン (Dauborn) に於る、老牧師のフェラー (Feller) と云う人が、私の父に、彼は私に学問させなければならぬと云つた時に、母は私に向つて次の様なことを欲して云うたのである。「御前は官吏になる可きである。小僧よ、どうして御前にはそんなことが出来るであらうか。それには御前は全

然適していない。」母は此のことを恐らく最もよく意識していたに相違ないのである。而して屢々私は後年に次の様なことを考えざるを得なくなつたのである。即ち私の様な人々は淋しい農舎で田畑を耕作し、而してその家畜を憐む方が元来適しているのであつて、是等の人々は此の、大なる世界には容易に精通せないのである。然しその為には、正に最も必要なものが缺けていたのであつた。そういう訳で私は郷関を出で、而して仮令私にはその為に必要な追隨性がなかつたけれ共、多くのことを通じて迂回曲折せなければならなかつたのである。このことが如何にして生じて来たかを、偽らずに公開することは、多分価値なしとせないであろう。殊に大抵の、他の人生よりもより多くの宿願を越えて行つた巡礼に於ては、そうである。

此の巡礼は、假令其が現存の、狭隘な諸制度が許した可能なことに到る処追従したけれ共、常に必ずしも開拓された軌道では歩まれなかつたのである。屢々波瀾が私の人生の小舟に面して怒号せんとする様に見える、然し再三それから切り抜け、而して遂に港に入ることが出来ている。然し此の、私の個人的運命の為に、私の起稿は注意を喚起したくないのである。私が経過せなければならなかつた処の土地と、而して施設とが、起稿に値する様に私には思われるのである、而して此の点に於て、私は恐らく文化史の一断片を書いたのであつて、此の断片は其が一個の人生の糸で貫かれていると云うことによつて、何物をも喪失し得ないのである。

私が汲み取つた資料に就ては、言ふには僅かである。最初私は全体を一九一七年の夏に私の、ささやかな、リ―ベンシュタイン (Liebenstein) の村居で記憶から殆ど一気に書き下ろしたのである。その後私は一九一八年に古い書翰類を捜し出したのであつて、是等は私の父が年数の経過するにつれて私から受取つて、而して堪念に保存して置いたものであつた。其の後二年にして、私の、亡くなつた妻が其の両親に宛てた消息が出て来て、是等

私が其の遺品の中から入手したのである。更に私の父、私の兄弟達、而して友人達、特にアー・シェフレ (A. Schäffle)、アドルフ・ワグナー (Ad. Wagner) 及びエー・ド・ラヴェレー (E. de Laveleye) が私に宛てた手紙類が、加わったのであった。唯私のライプチヒ時代だけが、かかる資料に缺けているのである。此処では、私は全然私の諸回想に頼ったのであった、然し一方では私は此の早期の時代に就ては若干の訂正と、而して補完とを前掲の書翰類から追加として採ることが出来たのであった。外交辞令的な入念を私は少しも要求せないのである。然し万事を誠実に私の胸裡に生きて残っている通りに描写した積りである。

之以外に、私の人生の過程が動機を与えた処の、若干の、折に触れての演説が、挿入されているのである。私がかかる演説を大抵予め書いて置くのであった。蓋し私は脱線を虞れたからである。実際としては、其の愈々と言う隣間には、若干の、他のことが、言われたかも知れないのである。然し気分画が其であつて、而してかかるものとして、是等は安じて収録されてもよいであろう。

私が説き及ばなかつたものは、私に取つては全く重要でない様に思われたのである。凡そ人間は人生で忘却す可き、極めて多くのことを持つていたのである。而して其の起る時に吾人に多く苦痛を生ぜしめ、而して頭を悩まして来た処の、若干の事柄は、後になって其の、全体の無価値となつて露われたのである。忘れる要求だけを持つてゐる人間が、何の為に是等の事柄を再生せしめ、而して何の為に此処でその避難所を許すのであるか。

私のライプチヒ (Leipzig) 時代を含むであろう処の第二巻を尙お書くに充分な時間と気分とがあるかどうか、私は今断言し得ないのである。

私が此の序文を書いている間に、私の幼孫は私の室の床上に座し、而して彼の積木箱の、小さい丸木から一本

の長い列車を組み立てて居り、此の列車は「仏蘭西に向けて父の処へ」走る筈になっている。其処で父は四年来戦場にいるのである。子供は同じ年頃の、曾つての、彼の父の様な顔付きをしている、而して若し彼が私と同居しているならば、私は屢々三〇年だけ若返った様に感ずるのである。彼が疲れて来ると、彼は私の膝の上に攀ち登るのである。私は老いたる手を彼の若々しい頭の上へ置くと、端しなくも、ソホフォクレスの、次の様な言葉が私に浮んで来る。「わが子よ、汝の父よりも幸運なれ、されどその他は父と等しくあれ、かくて汝は卑しき者たらざらん。」

リーベンシュタイン温泉 (Bad Liebenstein) に於て

一九一八年九月卅日

カール・ビュヒャー

以上は本書序文の拙訳紹介であるが、本書の内容は教授が転住された都邑別に一五篇に分章され、夫々在住した年代が附記されている、即ち次の通りである。

- | | |
|-----------------------------------|------|
| 一・キールヘルク (Kirberg, 1847-1861) | 一頁 |
| 二・ダウボルン (Dauborn, 1861-1863) | 五五頁 |
| 三・ハダマール (Hadamar, 1863-1866) | 六七頁 |
| 四・ボン (Bonn, 1866-1867) | 八九頁 |
| 五・ヘッペンハイム (Heppenheim, 1867-1868) | 一〇二頁 |
| 六・ゲッチェンゲン (Göttingen, 1868-1869) | 一一〇頁 |

七・ボ	ン (Bonn, 1869-1870)	一一八頁
八・ゴ	ーデスベルク (Godesberg, 1871)	一二八頁
九・ア	ムステルダム (Amsterdam, 1871-1872)	一三七頁
一〇・ド	ルトムント (Dartmund, 1872-1873)	一五〇頁
二・フ	ランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main)	
A・	ヴェーラーシューレン (Die Wählerschule 1873-1878)	一六四頁
B・	フランクフルト新聞 (Die Frankfurter Zeitung, 1878-1880)	二二四頁
三・ミ	ュンヘン (München, 1881-1882)	二四九頁
三・ド	ル。パット (Dorpat, 1882-1883)	二八〇頁
四・バ	ーゼル (Basel, 1883-1890)	三二三頁
五・カ	ールス・ルーエ (Karlsruhe, 1890-1892)	四五七頁

此の内容概目からも分る通り、氏が人と為つた一八四二年から一八九二年迄の、即ち四五年間の自叙伝であり、氏が其の生涯を閉ぢたのは、一九三〇年のことであるから、八三年の全生涯中、約其の前半生が含まれている訳である。氏の残した業績の中で、最も博く読まれた「国民経済成立起源論」が公刊されたライプチヒ時代がなしいのは、寔に残念である。然し氏が新聞学の發達に貢献する契機となつた、フランクフルト新聞の記者生活を送つた時代は、幸にも此の第十一章に展開されているので、他日又別に稿を起して、此の点に触れることにする。而して此の方面の氏の論稿は、内外の世界人名辞典の何れもが、氏の伝記を叙するや、氏が後期歴史派経済学者

として活躍した以外に、尙ほ独逸新聞学の發達に寄与せしことの多大なるを合せ記しているのにも分る通り、今後一層注目されることであらう。